

明治時代の公立医学校

廃止の顛末 その一

西川 溟 八

一県一医科大学を目標にして新設されてきた医科大学は、八〇校にして終止符を打った。地域社会の医療需要が昂まるので、当然医師の養成を増大しなければならぬが、医療の動向や社会情勢の変化等を総合的に勘案した上で、適正な医師数を予測した上で養成するのだから、忽ち医師過剰時代が招来されるとする危惧を生ずることになる。

由来、わが国の医学校ブームは明治初年から三回おこっている。この前のブームは第二次世界大戦に際して軍医要員を拡充するために医学校を増設したもので、七四校に達している。第一回のブームは明治九年の九校から十二年までの三年間に四八校に増加している。この時の医学校の構成は大学一、官立医学校一、公立医学校二一、私立医学校

二五であった。しかし当時の私立医学校は開設者が私物視して存廃を決めていたごとく、五年後の明治一七年には僅かに二校のみとなっている。地域医療を支える公立医学校は明治一三年には三〇校に増えている。しかし明治一二年の埼玉県医学校の廃止に始まり、二一年には三校を残すのみとなってしまった。これは医師というヘルスマンパワーの養成に確乎とした一貫性をもつ政策が立っていないためであることは明らかであり、当時の公立医学校廃止の経緯を明らかにして、今回の医学校ブームを收拾する際の参考に供したいと考えるものである。先ず関東地方の三校につき報告する。

埼玉県立医学校が設立されたのは明治九年（一八七六）一月のことで、時の県知事が県民の保健医療向上を目的として創設されたものである。正則生と変則生とが入学しているが、開校当時正則生が二八名、変則生が三六名採用されている。修業年限は変則生が三年で、正則生は四年以上とされていた。したがって明治十二年には変則生は修業年限を終えて卒業しているものが三二名に達している。埼玉県立医学校廃止は明治一二年八月に県知事から学校当局に通

知されているが、その直接の理由は、同年五月に提出された臨床医学教育の拡充を期するため増改築費五九八円六二銭五厘であった。たまたま本年に埼玉県の第一回議会が召集され、七月一六日に医学校の予算審議が行なわれた。そこで非常に高額な費用が医師養成に使われるが、医学校の所在地は県南に偏っており北部の住民には利用できない。

それより神奈川県や茨城県などのごとく東京大学医学部に依頼して（別課生として）教育してもらおう方がよいという意見が県北の群馬県に医学校を移されてしまった地区の議員から出たためとされている。つまり埼玉県立医学校の場合には、県財政の健全化を表面の理由として、政治的確執の犠牲となって廃止に追い込まれたことになった。

次に群馬県医学校の顛末を調べると、明治九年五月、未だ熊谷県が存在した頃、県令楫取素彦は医療の水準向上を図り、衛生所（局）を発展させて西洋医師の良医を養成することを企図し、「衛生所医学校」を創設した。そしてこれを熊谷県医学校と名づけて文部省に開業伺を提出した。ところが同年八月に熊谷県が廃されて群馬県となり、県庁は前橋に移されたので、医学校も前橋の横山町に移され、

校名も群馬県医学校に改められたのである。修業年限は六ヶ月を一期として六期すなわち三年を定期としているので、訳書を以て教育する変則生に当る学制であった。その後明治一二年一二月には校則、教則が改定され、四年制に発展している。しかし明治一四年（一八八一）三月の県議会において、費用多額のためと応募者が少ないために、「医学校費」は全廃されて、創立以来僅か五年で廃止されてしまった。そして東京大学医学部の別課生として三〇名を入学させた。この間全科卒業の生徒は二〇名あったということである。

栃木県医学校は明治九年九月に栃木町に栃木病院附属医学所として発足した。明治一一年四月には栃木医学校、翌一二年一〇月栃木県医学校と改称した。この校長は大家森重から三浦省軒（東大医学部内科教授三浦謙之助の兄）に代ったが、一三年六月満期となり、長谷川順次郎（済生学舎の創立者で後の衛生局長長谷川泰の弟）が校長心得となり、ついで校長に嘱任された。明治一五年（一八八二）火災にあって校舎は焼失してしまい、県会で費用の支出が拒絶されて六月廃止となった。（日本大学医学部公衆衛生学教室）